
ハーフサイクル

SYo-KeN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフサイクル

【Nコード】

N3161M

【作者名】

S Y O - K E N

【あらすじ】

今作は東方Projectの二次創作小説です。オリジナルキャラとか平気で出てくるのでご注意ください。むしろオリジナルキャラ主体です。

・現在パソコンで執筆している東方二次創作小説「獣蹄鳥跡」との若干の関連を持っているため、そちらと同時進行で更新するため更新は遅いです。後、一回の更新料も非常に少ないです。

・小説を書くのは素人なので文章力とかそついったものに関しては自信はありません。この作品を通して成長していけたらと思っています。

るので温かい目で見守ってやってください。

・携帯でちまちまと書いているのでパソコンで書くよりさらに文章が甘くなっているかもしれません。ご了承を。

第1話

カラツとした夏の暑い日差しが上空から容赦無く降り注いでくる。

幻想郷は今夏を迎えようとしている最中だった。

冬は雪が積もり猫がこたつで丸くなるくらい寒くなるのに、夏は一転して茹で上

がってしまうのではないかと感じるくらい暑くなる。

冬はこたつに入りながら早く温かくなりたいかと願っていたのに、温かさを通り

越して暑くなれば早く涼しくならないものかと願っている。

• いっそのこと夏や冬なんて無くなって、春と秋だけになれば良いのに………

ソレは、焼けるような陽射しの下を歩きながらずっと思索していた。

そんな都合の良い異変が起きれば、もっと快適に暮らせるのに。

そう考えながら目的の場所へ向かう。

行き先は妖怪の山。

人間でありながら山に顔パスで入れるのはそういない。

あの博麗の巫女だって以前山に登ったときは侵入者扱いを受けていた。

だからもしかしたら私だけかもしれない。

そう考えると自分がちよつと特別に思えて嬉しくなる。

といつても、今日は遊びに行くわけじゃないからちよつと荷が重いかな。

彼女は以前妖怪の山の麓で一人の天狗と出会った。

その天狗は新聞を作っていて、彼女はその新聞の購読者。

そのとき少し意見を述べてみたら感心されて、以来親交を保っていた。

またその天狗から話が漏れたのか、他の天狗からも新聞を読んでアドバイスをしてほしいと頼まれるようになって、時々妖怪の山に赴くようになった。

基本的には自主的に気が向いたときだけ行くのだけど、今日は違った。

家に手紙が届いて、今日の昼までに大天狗の屋敷に来るように指示された。

大天狗さま？とは会ったこともないから正直何の用件で呼ばれたのか分からなくてドキドキしてる。

悪いことじゃなければいいけど……

そんな不安と暑さに対する妬みと異変の願望を抱きながら、彼女は妖怪の山を登りはじめた。

少女が山道をしばらく歩いていると、道の先に大きなリュックを背負った青服の

河童、河城にとりの姿が見えた。

少女がにとりの名を呼びながら駆け寄るとにとりが話し掛けてきた。

「久しぶりだね、來夢^{らいむ}。2週間ぶりかな？」

「お久しぶりです、にとりさん。お出かけですか？」

背中の大きなリュックサックは重くないのかなと疑問に思いながら來夢は挨拶を返した。

「うん。ちょっとはたてさんにカメラを修理してほしいってお願いされてね。」

「あー、文さんの親友の天狗さんでしたっけ。変わった形のカメラを使ってるあの」

「そーなんだよー。だから修理の依頼があると興味津々でみんな行きたがっちゃって」

やれやれと肩を竦める。

恐らくここにくるまでにいろいろあったのだろう。河童の探究心はすごいから。

「それで、來夢はまた天狗の里に遊びに行くの？」

「そう……ですね。今回は遊びに行くわけではないので少し違います」

「……もしかして、大天狗様に、呼ばれてるの？」

「え？そうだけど、何で分かったんですか？」

「あ……い、いや。何となく！何となくそうかと思ってただけだから」

「？」

にとりさんの様子がどこかおかしい。

何だか妙に白白しく感じる。

「何か知ってるんですか？」

「あ、もうすぐ約束の時間だから私は行かないと。それじゃ」

リュックが揺れないよう2本の紐を両手でしっかりと握ると、にとりはその場から逃げ出すようにそそくさと小走りであつていった。

「にとりさん……何か知ってるのに隠そうとしてる。一体何を……」

何を？

そんなの決まってる。

私が大天狗さまに呼ばれているその理由。

「……………」

にとりの態度が來夢の心を不安に揺らす。

今すぐ引き返したい。

でも、約束を破れば、果たしてどうなってしまうのか。

結局のところ彼らは妖怪で、私は人間。

捕食関係にあることに代わりはない。

どっと押し寄せる得も言われぬ畏れにくじけそうになりつつも、
夢は山道を進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3161m/>

ハーフサイクル

2010年10月15日20時17分発行